高原の自然史 *Natural History of Nishi-Chugoku Mountains* 5：1～23（2000）

牧野富太郎博士の八幡来訪と自然をベースにした町づくり

水野　尚志

芸北町教育委員会教育長（高原の自然史編集委員会委員長）

Dr. Makino and the nature-based Town-Planning

Takashi MIZUNO

Superintendent, the Geihoku-cho Board of Education, Geihoku-cho 731-2323

Abstract: Dr. Makino, the world-famous botanist, visited Yahata twice in 1933 for the purpose of the plant collecting. A group of those who are interested in history came to Geihoku-cho all the way from Ochi-cho, Kochi Pref. in July 1998. These started a cultural exchange between the two towns. A precious stone, which was presented by Ochi-cho, was inscribed with a Haiku, and erected in Geihoku-cho in memory of Dr. Makino's visit. The Haiku on it was the one Dr. Makino composed in Geihoku-cho. The Town-Planning on the natural nature is being promoted in Geihoku-cho. Dr. Makino's visit emphasizes the rich variety of nature in the Nishi-Chugoku mountains area. The museum, which will also be used as "Visitor Center", will be constructed in Geihoku-cho. Geihoku-cho is actively promoting a positive Town-Planning policy.
© 2000 Geihoku-cho Board of Education. All rights reserved.

はじめに

1933（昭和８）年と1937（昭和12）年の２回にわたり，世界的な植物学者牧野富太郎博士が，芸北町八幡の地に植物採集に訪れているという経緯がきっかけで，博士の生誕地高知県高岡郡佐川町の隣にある越知町と芸北町が，1998（平成10）年より友好町として交流を始めている．

その越知町から友好の証に特産の青石を寄贈いただいたので，博士が芸北町来訪時に詠み揮毫された句「衣にすりし　昔の里か　カキツバタ」を博士郷土の石に刻んで，八幡村訪問の1933年６月４日に因んで1999（平成11）年６月４日，句碑の除幕を行った．このかげには，町当局はもちろん児玉忠臣委員長を中心とする地元八幡地区の実行委員会のみなさんを始め，八幡振興会，そして町内外の牧野博士を愛し芸北の自然を愛する多くの方々のご厚意があった．

この事業を機に，芸北町の長期総合計画にもりこまれている「全町自然博物館構想」の中で，八幡地区が「ネイチャーゾーン」として位置付けられていることから，牧野博士の八幡来訪を自然の保護と活用，地区の活性化につなげていくよう，計画の具体化をはかろうとしているところ

である．その具体的な計画とは，博士が植物採集をされた八幡高原の一角に，1991（平成３）年度から芸北町教育委員会が開始した「自然学術調査」（本誌第１号に詳細を記した）によって，収集された動植物の標本や写真などの展示をはじめ，自然と共生した山村の人々の暮らしを証明する民俗資料の展示，また暮らしの中から生まれた食文化や暮らしぶりが体験できる施設を建設しようとするものである．いわゆる，自然史系と民俗系とが有機的なかかわりをもって機能し合える施設づくりを進めていく．そして，どんなに小さくても自然を求めて芸北町を訪れる多くの人々に，この場に来れば芸北のいや西中国山地の自然について案内ができるような，「ビジターセンター」的な役割を果たせる施設になればこの上ない．この計画を「生き活き暮らしの博物館」づくりと名づけている．目下，これの実現のために町行政は八幡地区の住民の方々と話し合いを行い，今後の進め方と取り組みの内容を協議しているところである．

あたかも，芸北町は1997（平成９）年度から５ケ年間，県の「中山間地域活性化モデル事業」の指定町村となり，併せて1999（平成11）年度より農山村の活性化をねらう「田園空間博物館整備事業」の農水省国庫補助を導入して，長期総合計画にもられたものを全町的に実施しようとしているが，自然を大切にした町づくりに取り組んでおられる越知町との出会い，しかもそれが世界の植物学者牧野博士がその縁であったということは，自然をキーワードにと考えている芸北町にとってこの上ない良縁であった．

ここに，越知町との交流，句碑の建立にいたるまでの経緯を紹介し，その間の多くの方々のお力添えと支援に対してお礼を申し上げるとともに，これを契機にした町内の自然をベースにした町づくりについていささかの考え方を述べてみる．

牧野博士の句碑建立までの経緯

１．芸北高原交流キャンプ　1998．７．19～７．20

この２日間，芸北町八幡高原「二川キャンプ場」において，高知県高岡郡越知町からの参加者と芸北町そして広島市内からの有志が集まりキャンプを張った．

越知町からの参加者

堀見矩浩（横倉山自然の森博物館館長）・山中伸一（川と山・ふるさと夢の会）・大野加恵（くろしお研究所）・岡林一水（理容院）・古味和憲（越知郵便局）

芸北町からの参加者

児玉　集（牧野博士の植物採集時の同行者）・柳崎誠子（町自然保護委員）・田村勝子（野花の館）・水野尚志（町教育長）・下杉　孝（教育次長）・近藤紘史（芸北デザイン会議代表）・岡本　進（町産業振興課長）・金田道紀（町教委主幹）・寿老長吉郎（町総務課主幹）・浄謙恭子（主婦）および恵照（小学２年）・池田郁子（主婦）および仁（小学２年）・水野洋美（主婦）・下杉美智（主婦）・向台邦子（文化ランドスキー場）・酒井光則（二川キャンプ場前管理人）

広島市等からの参加者

紺野　昇（中国新聞社写真部長）・桑升茂敏（会社員）・大垣雅史（㈱フジパブリックス）・

畝崎雅子（ひろしま通訳・ガイド協会）・清水正弘（辺境の旅プロデューサー筒賀村）・辰本　実（フリー写真家）・フェリックス（キューバのタンゴ歌手）

キャンプの呼び掛け人

畝崎辰登（広島市－㈱フジパブリックス）・大野加恵（高知県土佐山村－「Ｗｅｂ高知」主宰・当時－くろしお研究所）・浄謙彰文（芸北町民文化ホール社会教育係長）

この行事には多くの参加者があったが，このことの背景には呼び掛け人の畝崎氏が，高知の大野さんとのインターネット交信の中で，「牧野博士が芸北町の八幡に植物採集に訪れたとき，同行した人があるらしいのでその人を訪ねたい.」と越知町の自然愛好者が希望しているとの情報に接した．芸北のことは家の庭くらいに詳しい畝崎氏のこと，すぐさまその案内人とは児玉　集氏（現在90歳）のことだと分かった．早速文化ホールの浄謙係長や教育委員会の金田主幹などと連絡を取り，児玉氏と越知町の有志との出会いを作る企画をしたのがこの芸北高原キャンプである．このキャンプの中で，児玉氏は65年も昔の牧野博士との出会いが，この頃になってまた彷彿として蘇るような機会に出会い，青年時代に博士と同行したときのことや，博士との出会いによって自分も一生植物を愛し，研究を続けることができたと胸を熱くして感慨深く思い出を語った．そしてこのキャンプで，一度越知町の町長を芸北町に招待し児玉氏にも会ってもらうよう話が進んだ．

２．高知県越知町＆広島県芸北町交流会　1998．９．８～９．９

キャンプ後，８月12日筆者が教育長として正式に越知町長へ招待状を出す．その後，吉岡珍正越知町長より９月２日に筆者へ訪問の返事あり．９月８・９日に実現することとなる．会場は八幡「高橋民宿」と八幡高原のフィールド．

越知町からの参加者

吉岡珍正（越知町町長）・西森耕治（越知町産業課長）・山中伸一（川と山　ふるさと夢の会）・大野加恵（くろしお研究所）

芸北町からの参加者

増田邦夫（芸北町町長）・高橋平信（芸北町助役）・児玉忠臣（前芸北町町長）・児玉　集（牧野博士の同行者）・水野尚志（芸北町教育長）・神田　守（芸北町総務課長）・下杉孝（教育次長）・岡本　進（芸北町産業振興課長）・栗栖幸徳（八幡振興会長）・金田道紀（八幡小学校長）・浄謙彰文（町民文化ホール社教係長）

広島市からの参加者

紺野　昇（中国新聞社写真部長）・兼森志郎および畝崎辰登（㈱フジパブリックス）

本交流会第１日目に，両町の友好交流とその証として，越知町から土佐の名石「青石」を贈呈することが約束される．

翌９日には，児玉　集氏の案内で65年前に牧野博士が群生するカキツバタを見て感激されたという上田郷を訪れ往時を偲ぶ．牧野博士は，最初に採集に来られた1933（昭和８）年６月４日，湿地一面に咲き揃うカキツバタを見て感激され，土手に座り込んで紫色の花弁をとって自分のハ

ンカチに擦りつけ，ハンカチが終わると，次には自分の着ておられるワイシャツにまで擦り付けて喜ばれたと，同行した児玉　集氏は懐かしく語る．カキツバタの語源は，「書付花（かきつけばな）」である．古代わが国ではカキツバタの花汁を直接布に擦り込んで染めていた．万葉集のなかにも「カキツバタ布（きぬ）に摺りつけ大夫（ますらお）のきそい猟（かり）する月は来にけり」（大伴家持）という歌がある．

その晩，「蓬旅館」に宿泊された博士は，昼間の感激を「衣（きぬ）に摺りし 昔の里か かきつばた」など，数点の句を詠まれ，条幅にそれを揮毫されたという．このことは，博士が自ら書かれた「植物記」や「植物知識」に記されているが，後に詳しく述べる．

最近になって，1937（昭和12）年に博士が再度八幡の地を採集に訪れた時の写真を，児玉　集氏が大切に保存しておられることが判明した．これを，中国新聞社の紺野写真部長が接写拡大することとなり，この中の博士と同行した人物（９人）の特定を急ぐことにする．

この特定のために，県立広島観音高校の内藤順一教諭（芸北町自然学術調査員・西中国山地自然史研究会会報「苅尾」の編集事務局）に協力を依頼する．

３．行政内部における打ち合せ

両町の交流が開始される動きに伴って，行政内部の組織である「八幡地区行政推進班」で，八幡地区の活性化計画である「ネイチャーゾーン」を具体化するために，博士の来訪をどのように位置付けていくか地元と行政の間をどう繋ぐか，検討に入る．

４．越知町町議会議員一行来町　1998.10.29

寺村晃幸議長をはじめ議員全員，岡本　明事務局長ら，他町村の視察の途中芸北町を訪問．本町から，増田町長，水野教育長，松本議会議長，松本議会事務局長，岡本産業振興課長が出席，芸北町の概要などを芸北町民文化ホールにおいて説明する．

５．広島県芸北町と高知県越知町交流会　1998.11.11～11.12

越知町から招待を受け，芸北町から越知町を表敬訪問する．宿泊は民宿「勢山荘」．

芸北町からの参加者

増田町長・水野教育長・岡本産業振興課長・金田八幡小学校長・政木和伸（八幡地区総代会長）・柳崎誠子（町自然保護委員）・畝崎辰登（㈱フジパブリックス）

越知町からの参加者

吉岡珍正町長・片岡正博助役・小野憲三収入役・山中弘孝教育次長・寺村晃幸議会議長・山中嘉壽馬副議長・斎藤政広総務課長・西森耕治産業課長・土井良彦産業課長補佐・堀見矩浩自然の森博物館長・小田保行博物館総務係長・安井敏夫学芸員・大野加恵（くろしお研究所）・山中伸一（川と山・ふるさと夢の会）他多くの行政民間の方

高知県からの参加者

坂本　彰（高知県文化環境部環境保全課長）・池本寛水（高知県立牧野植物園園長）他　植

物園の関係者

11日，高知県立牧野植物園と建築中の新館を見学．1999（平成11）年11月開館予定と聞く．植物園内にある牧野文庫では，図書館司書の小松みち氏より，牧野博士が収集した和漢の本草書や洋書，博士直筆の植物画や原稿，日記など約58,000点の資料について詳しく説明を受ける．その日記の中に，まさしく芸北町八幡（当時八幡村）に植物採集に来られたことを証明する地名や日付，蓬旅館の名前があり65年前にタイムスリップし博士との距離を縮めた．

また，スエコザサというササが植物園に多くあったのに出会ったが，奥様の名をとって博士が名付けられたと聞き，深い夫婦の絆と奥様の支えが博士の今日をあらしめたということに新たな感動を覚えた．このスエコザサは，後に土佐の青石とともに植物園から芸北に１株贈呈された．

越知町と植物園に対し，博士が感激された八幡のカキツバタが一面に咲き揃う額入り写真（廿日市市の田原一久氏撮影）と，採集時に八幡において発見されたというヒメカンアオイ（ヤチカンアオイ）を１鉢贈呈する．

12日，博士が幼少の頃この山で遊び植物に興味をもったという横倉山へ案内を受ける．そしてそこに建つ「横倉山自然の森博物館」の案内を堀見館長をはじめ職員の方にしていただく．この博物館のメインはなんといっても今から約４億３千万年～４億２千万年前のシルル紀と呼ばれる頃のサンゴを主とする化石である．また，牧野富太郎博士のコーナーもあり，横倉山にあるアカガシの原生林，その中で繰り返される自然のサイクルや感動的ないのちのドラマがジオラマになっていたり，博士がこの山で発見，命名した植物や，フィールドワークの様子を見ることが出来るようになっている．

大変驚いたのは，越知町の行政職員のだれもが自然に対しての一通りの知識があって，植物の名前や生態にしても，訊ねれば答えが返るという態勢になっており，町の姿勢をうかがい知ることができた．

当日，博物館で越知町と芸北町のトップ会談が行われる．

(1)両町の小学校児童の交流を考える

(2)越知町の名石「青石」を寄贈すること．

(3)芸北町の神楽を越知町に派遣すること．

(4)両町の農産物など特産品の販売促進をすること．

芸北への帰途，博士の生誕の地越知町の隣り町「佐川町」の生家の跡を訪ねる．

６．越知町より千代田町の㈱中野石材まで青石が届く　1998.12.19

７．広島県広島農林事務所の伊藤之敏次長を訪ねる　1998.12.25

水野教育長，金田八幡小学校長，兼森志郎および畝崎辰登（㈱フジパブリックス）の４人で，植物への関心が高く，牧野博士についても詳しいと聞き伊藤次長を訪ねる．

伊藤次長はまさに植物への関心が高く，植物研究報告書にも自ら描かれた植物の線画が載っている．また博士のことについても詳しく，65年前の広島県における博士の足跡を明らかにすることや，八幡の自然をベースにした地域づくりについても，協力を惜しまないと力づけられる．

8．句碑の建立について八幡地区内で具体的な検討が始まる　1999．1．20

八幡地区総代会において，博士の来訪と句碑の建立の意義，地域の活性化について学習と協議がなされる．

(1)越知町との交流にいたる経緯

(2)句碑建設の意義

(3)建設のための予算と資金計画について

9．八幡高原ふるさと自慢運動推進協議会と行政推進班との会議　1999．2．4

増田町長，高橋助役，水野教育長，行政推進班のメンバーと，地元総代，各種団体代表とが，句碑建立の意義と資金調達について協議する．

10．写真の人物の9人中8人が判明　1999．3．1

観音高校の内藤教諭により，児玉氏所有の写真の人物が，9人中8人まで特定できた．ほぼ間違いないと思われる．関　太郎先生（広島大学名誉教授・広島県自然環境保全審議会委員）の協力をえたと報告を受く．

11．句碑建立実行委員会結成　1999．3．3

会長は児玉忠臣（前芸北町長）氏と決定．いよいよ句碑の建立に向けて始動し始める．資金調達は，地区内は勿論，町内外の牧野ファンに広く呼び掛ける．地元八幡振興会，芸北町の助成も要請することとなる．また，牧野博士が感動されたというカキツバタ園を，約800㎡ほど句碑の側に造成することを決定する．

12．越知町青年会スキーに来訪　1999．3．6～3．7

越知町青年10人スキーに訪れる．芸北の青年と交流．このとき高知県立植物園からスエコザサが届く．

13．芸北町3月定例町議会において町長が報告，提案　1999．3．10

越知町との友好交流について，町長が正式に経緯と句碑の建設について報告．

14．博士の八幡での採集時の同行者升本修三氏の長男宅を訪問　1999．4．21

1937（昭和12）年，博士来訪時の臥竜山山頂での記念写真の9人の人物が特定されたが，その中の1人升本修三氏（1938[昭和13]年広島文理大卒業，植物生理学，放線菌類専攻，当時助手）の長男升本 裕氏が，広島市内に在住と判明（1999．4．17．「中国新聞」朝刊掲載から家族の申し出），水野教育長，金田校長，兼森および畝崎氏（㈱フジパブリックス），関　太郎先生で升本氏の宅を訪問する．

修三氏の写真帳を前に生前の思い出と，修三氏の人となりを拝聴する．床の間には，牧野博士の直筆の句が一幅掛けられていた．

「朝夕に　草木を吾の友とせば　こころ淋しき折りふしもなし」　牧野結網

15. 牧野富太郎博士の句碑除幕とカキツバタ園の完成　1999. 6. 4

66年前の6月4日に因んで，1999（平成11）年の6月4日芸北町「臥竜山麓八幡原公園」（県有地）の一角に，牧野富太郎句碑建立実行委員会（代表　児玉忠臣）の手によってめでたく除幕，併せてカキツバタ園が完成した．

句碑の側には，1927（昭和2）年博士が仙台郊外で発見された新種のササで，翌年亡くなられ，生活の一切を切り盛りされた寿衛子夫人の名前に因んで名付けられた「スエコザサ」が植えられた．このササは高知県立牧野植物園から寄贈されたものである．

また，この日には博士の孫にあたり，生前博士ともっとも身近にあったといわれる西原澄子（現在岡山市に在住，78歳）さんにも参列，除幕いただいたことは記念すべきことであった．さらに，西原澄子，児玉　集両氏から，博士の生前をふりかえり感慨深いスピーチも参加者の心をとらえた．そして八幡小学校の児童，幼稚園児が全員で「田楽」を披露し句碑の除幕を祝ったが，今後の学校教育の中で，博士と植物そして芸北の自然について学ぶことのきっかけづくりとなり，その意義は深い．

越知町からの参加者

吉岡町長・片岡助役・西森産業課長・山中教育次長・小田自然の森博物館総務係長・山中伸一（川と山・ふるさと夢の会）・大野加恵（生活創造工房／前くろしお研究所）

来　　賓

西原澄子（博士の孫　岡山市在住）・河原君江（句碑に刻んだ掛け軸の所有者）・児玉　集（博士の八幡来訪の時の同行者）・升本　裕（1937.10.11.博士来訪時の同行者升本修三氏の長男）・国会議員，県議会議員，町議会議員，県関係者ほか約50名

参　加　者

地元八幡地区を中心とする芸北町民，町外からの自然愛好者約250名

施　工　者

句　碑　広島県山県郡千代田町大字寺原3445-1　㈱中野石材

カキツバタ園　広島県山県郡芸北町東八幡原301-7　柏原建設

句　　碑

除幕された句碑の碑文を以下に示す．

碑　　文

「衣にすりし　昔の里か　燕子花」　牧野結網

昭和八年六月四日芸州八幡村かきつばた自生地にて

世界的な植物学者，牧野富太郎博士（1862～1957）は，高知県佐川町に生まれた．幼少から生

家に近い越知町横倉山を中心に独学で植物の研究を始め，95歳の全生涯を植物一筋に捧げた．

博士は全国を踏査して植物を採集されたが，この八幡高原には昭和８年と昭和12年の２回足を運ばれた．初めて来られた昭和８年６月４日，上田郷の湿地一面に咲くカキツバタの自生地を見て感激され紫の花汁を自分のワイシャツに擦りつけ句を詠まれたという．

この度，自然と人間の共生をねがう越知町と芸北町との交流が始まり，友好の証に越知町から土佐石が寄贈された．その石に，博士自筆の句を刻み，八幡の自然を永く保存し，慈しむ礎としたい．

平成11年６月４日　　牧野博士八幡来訪66年目の日に

芸　　北　　町
牧野博士句碑建立委員会

除幕された句碑を図版Ｉ－Ａ・Ｂに示す．また，その設計図を図１に示す．

これ以後も，芸北町から八幡小学校の児童や議会議員が越知町を訪れたり，越知町から商工会女性部や横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」会員の来町があるなど，ますます両町の交流は深くなっている．

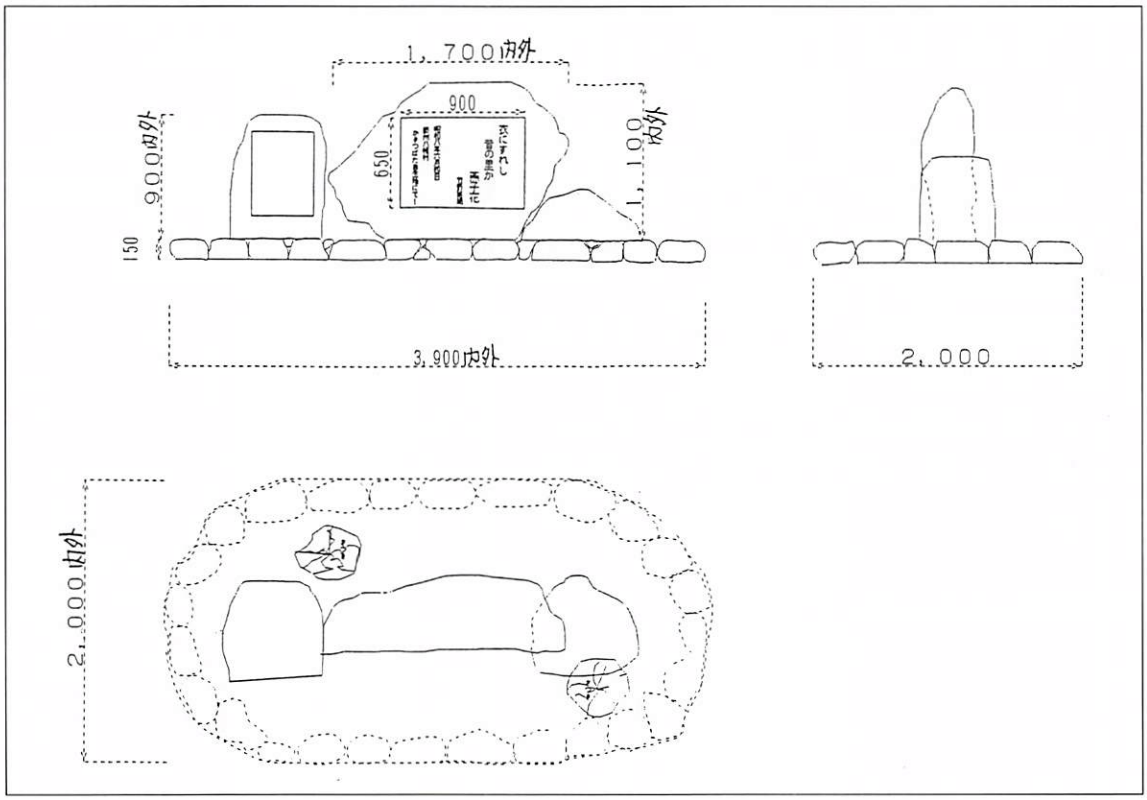


図１　句碑の設計図

牧野富太郎博士と芸北町八幡高原

牧野富太郎博士　　Tomitaro Makino （1862～1957）

1862（文久２）年高知県高岡郡佐川町の豪商（酒造）の家に生まれる．幼くして父母を失い，祖母の手で育てられる．裏山で草木を相手に遊ぶ少年だった．また，明治維新の自由な気風の中，私塾や藩校で高度な学問的要素を身につけた．小学校は２年で退学，独学で植物学者を志す．22歳で上京し，東大植物学教室に出入りしながら研究に没頭．「植物学雑誌」を創刊，日本人の手で初めて新種ヤマトグサに学名をつけるなどの目覚ましい業績を挙げ，わが国植物分類学の基礎を築く．自ら石版印刷した「日本植物志図篇」や，精密を極めた図によって世界的評価を受けた「大日本植物志」を刊行，植物画の第一人者としても知られる．

発見した新種新変種は約2,500種，全国踏査して集めた標本は約50万点．日本の植物を最もよく知る植物学者だった．集大成の書「牧野日本植物図鑑」は今なお愛され，ロングセラーを続けている．

1939（昭和14）年まで東大講師として勤務．植物知識を平易に説いて全国のアマチュア愛好家を指導．晩年も研究への情熱は衰えることなく，95歳で植物一筋の生涯を終える．

博士は自ら命名した植物に出会うと，腹ばいになって「名付け親が来たぞえ」といいながら，いとおしそうに頬ずりをしたと聞く．これほど植物を愛した学者は希有である．没後，文化勲章受賞．

＝高知県立牧野植物園「牧野文庫」利用案内パンフレット・東京国立博物館「草木の精 牧野富太郎」展パンフレットより引用＝

牧野富太郎の植物画

牧野富太郎は，生れつき植物が好きだったうえ，植物を図描する才能にめぐまれていた．郷里の佐川町にいた少年時代に，早くも和紙に描いた多くの植物画を残している．

自然科学の基礎は観察であり，その結果を伝えるのに図にまさるものはない．博士はそのことを認識し生涯かけて精密な図による日本の全植物の記録をめざした．

江戸時代においても，本草学の範疇にとどまらない純然たる植物図が多くつくられ，幕末にはリンネの体系によった「草木図説」（飯沼慾斎著）も著わされているが，西欧の印刷に肩を並べることのできる図版の登場は，牧野富太郎博士を待たねばならなかった．

富太郎の図は，植物の備える情報を正確に表現するため，植物の「かたち」を写真のようにあるがままにではなく，その典型がよく表れるように，時には葉や茎，花弁などを少し捻った角度から描いている．さらに，部分図や解剖図をふんだんに盛り込みながらわずらわしさがなく，立体感をもって，枠のなかに美しく収めているのも特徴である．

また，これらの植物画は毛先の細い面相筆で描かれ，彩色は色変わりを嫌ってイギリスの最高級品ウィンザー・ニュートンの絵具を使用している．

1888（明治21）年「日本植物志図篇」を刊行以来，多くの植物図鑑を世に出し植物画の歴史に大きな足跡を残すとともに，日本の植物分類学の基礎を築いた．

＝高知県立牧野植物園所蔵「牧野富太郎植物画集」より引用＝

牧野富太郎博士と八幡村

牧野富太郎博士は，広島文理科大学の非常勤講師として広島との関わりは深い．高知県立牧野植物園牧野文庫の「広島県における牧野博士採集踏査の記録」によれば次のように記されている．

1904（明治37）８月　６日安芸長者町でヤリテンツキ採集（植物学雑誌19-225）
1908（明治41）９月　18日厳島　19日植物学会歓迎会　21日比治山
1911（明治44）９月　６日広島　恵下山－佐伯郡水内村字和田の鉱泉湯に泊
７日不明（アケズ）－恵下採集　８日広島（夜高師で講話）　９日広島
９日広島発
1913（大正２）　筆影山　宮島
1923（大正12）　大野村
1928（昭和３）８月　16日宮島・三段峡・南原峡
1931（昭和６）12月　７～12日広島－虹ケ浜採集－三田尻
1932（昭和７）　帝釈峡－美子登連峰（比婆山）－吾妻山
1933（昭和８）５～６月５月27日広島　６月２日三段峡　４日八幡村（カキツバタ自生群落を見る）　５日広島　６日宮島
1933（昭和８）８月　10日広島　11～12日瀬戸内海巡り（チシマザサ・オオノザサ発見）
15日広島発
1934（昭和９）10月　11～15日広島文理科大学講義　三段峡・南原峡・大野村
1935（昭和10）６月　23～25日帝釈峡　首頭村　神石ホテル
1937（昭和12）10月　４日広島文理科大　８日三段峡　９日三段峡（蜂に10ケ所刺される）
10日樽床（カキツバタ自生地を見る）－蓬旅館泊　11日刈尾山－広島
12～15日文理科大教室　16日広島 魚崎
1938（昭和13）11月　16～20日広島
1940（昭和15）　宇品
（下線は筆者が記す）

このように，県内各地の採集会，野外実習には指導者として来広され，教えを受けるため県内外から多くの人たちが参加したようである．

1933（昭和８）年（博士71歳），６月２日～５日にかけて三段峡，八幡村で，1937（昭和12）年10月８日～11日にかけて三段峡，樽床，刈尾（臥竜）山などで植物採集をしている．

また，その様子は，博士の日記（高知県立牧野植物園「牧野文庫」所蔵）や，1937（昭和12）年10月11日の刈尾（臥竜）山山頂で同行者とともに写っておられる記念写真からも知ることができる．

以下，牧野文庫から入手した1933（昭和８）年と1937（昭和12）年の「日記」を紹介する（図版Ⅱ－Ａ・Ｂ）

６月１日　　同
午前十時 ― 十二時
晩に広島植物同好会の集会に臨む（明治堂階上にて）
６月２日　三段峡
朝八時自動車○○にて広島出発　堀川芳雄　高木哲雄両氏　其他学生等二十八名順路三段峡入口に達し　自動車を下り昼食し○○に従って峡中に入り　薄暮羽田別荘旅館達し宿す　採品を始末す
６月３日　三段峡 ― 蓬旅館
羽田別荘を朝出発　峡中を串き八幡村に出て途中にてヒメザゼンソウなどを採り蓬旅館に宿す　採物を始末す　此日三段峡附近にてフヂ新種を見出す　三峡フヂと命名す　　右まき也
６月４日　安芸山県郡八幡村大字西八幡原一七〇三
蓬旅館（蓬○作）― 広島
蓬旅館を出で大学演習地に向かう途中カキツバタの自生地を過り今正に花盛りにて遅からず早からずという有り様なり　処々に白フヂの満開を見る　皆植栽品し又自生のフヂの花盛りを見る　演習地にエンコウソウ多くヒメザゼンソウを見る　蓬旅館に帰り　同処より午後二時頃自動車にて夕刻前広島に帰り大学にて採品を始末し深更帰宿す
10月９日　~~白午後三時至五時講義 安達押花芸術学校（赤坂区青山南五丁目十八）~~　延期セリ
三段峡中の羽田旅館出発　猿飛より左方の山路に入る　山路にて蜂に襲われ七ケ所螫されたり　遂に樽床に出で峡北館に投宿す　採集品を始末す

この蜂に襲われたときのことを，10月14日付けの次女に宛てた葉書の中で次の短歌を詠んでいる．

「七ところ　蜂に螫されて　腫れ上がり　痛き記念を　残す三峡」

また，別の資料によると七ケ所だと思っていたが，数えてみると十ケ所だったという記述もある．蜂に螫された場所場所の地図も残っている．（県立牧野文庫の司書の説明）

10月10日　樽床 ― 蓬旅館
樽床峡北館を出で北行し蓬旅館に到着す　小憩の後北行大学所管の野地に行き薄暮帰宿す　カキツバタ自生地に一軒の民家建ち景致を損せり　○に入り採集品を始末し就寝す
10月11日　蓬旅館 ― 広島
朝蓬旅館出発　刈尾山へ登る　同山を反対側に越す　笹原の小径を分け行き遂に下山す　午後五時小板より自動車にて松原峠越す　峠ニテ堀川氏ヤドリギを撮影す　途中○に入る　午後九時広島に着帰宿す
10月11日　雨後晴　教室出勤
朝　犬丸　慤氏来訪　教室に出勤　午後一時より講義す　採集し来たりし標品整理す

また，この時に撮影された写真は図版３－Ａ・Ｂに示す．

八幡のカキツバタと俳句

博士が植物に出会い歓んで詠まれた俳句や歌は沢山あるが，八幡のカキツバタの自生地を見つけて感動された様子は，1943（昭和18）年８月に出版された「植物記」にその記述がある．

「私は昭和八年六月に広島文理科大学の学生を連れ同縣下を旅行した時，ずっと北の山縣郡の八幡村という辺鄙な所に行ったのである．其所に二町ぐらいカキツバタが野生して居るところがある．それは道の縁になって居る平地です．ああ云う広い所にあれくらいカキツバタが野生して居る所はちょっとない位に盛んに生えていた．六月ですから花盛りで，非常に綺麗に花が咲いて居た．私は染々見ている間に，染料上の色々なことが頭に浮かんで来た．沢山咲いて居るので，見渡す限り鮮やかな紫色の一色です．花を取て潰して絞ると汁が出る．それをハンカチに摺ってみたところが誠によく染まる．少しもムラがなく紫色に染まって居る．これは乾くと生の時よりも色が薄くなって藤色みたいになる．其時は夏のことですからワイシャツが白であった．胸にも大いに摺り着けた．昔の人の気分になろうと思って，やたらに花を摺り着けて一人悦に入った訳です．そこで此れは誠に拙劣な川柳みたやうな俳句みたやうなものですが，其時の感じは，

衣に摺りし昔の里かかきつばた
ハンケチに摺って見せかけかきつばた
白シャツに摺りつけてみるかきつばた
此の里に業平来れば此所も歌

業平は三河の国の八橋というカキツバタ名所に行って歌を詠んだが，この八幡村に来たらきっと歌を詠んだろうと思う．

見劣りのしぬる光琳屏風かな

光琳のカキツバタの屏風は有名なもので，今は何万円もするかも知れない．けれども此實景に比べては光琳の屏風などは無論問題ではない．

見るほどになんとなつかしかきつばた

昔の事を思い出して見て居ると何となくカキツバタがなつかしくなる．

去るは憂し散るを見果てむかきつばた

此所を去るのはどうも惜しい．カキツバタが凋んでしまうまで此所にいたいと云う感じです」

（「植物記」＝染料植物について述べる＝より抜粋）

このように，「植物記」には八幡での感動を句に詠んだことが載っているが，これ以外に八幡入村の時に詠み揮毫された句のあることと，その所有者も判明した．

衣にすりし　昔の里か　燕子花	牧野結網	河原君江氏　所蔵
草を褥に木を枕　花と恋して五十年	牧野結網	河原君江氏　所蔵
仙境の　三段峡に　異草採る	牧野結網	間所　了氏　所蔵
山里の　一畝の畑や　麦の秋	牧野結網	野田耕作氏　所蔵

雅号「牧野結網」のこと

牧野富太郎博士は，「結網（けつもう）」という雅号を付けている．それは，「漢書」に「臨渕羨魚之美不如退結網」という語があるが，ここから引用して「結網」と名づけたようである．

1944（昭和19）年11月30日，牧野結網書として，この「漢書の語」が揮毫されていることから推察することができる．（「渕に臨んで魚がいるのを得たいと願うよりか，退いてすぐに網を結んだほうがましだ」の意味か）

自然をベースにした芸北町の町づくりと「生き活き暮らしの博物館づくり」事業

芸北町のまちづくりと「生き活き暮らしの博物館づくり」の位置づけについて，図２，３，４，５，６，７に示す．

●豊かな自然資源と町外ファンが多いという特長をいかし、芸北町では現在、広島県の中山間地域活性化モデル事業の指定を受け、定住及び四季型、滞在型の交流の促進を狙いとしたまちづくりをすすめている。

●具体的には、芸北町内を５つの地区に分け、それぞれ特徴的なテーマを設定し、まちづくりをすすめている。八幡地区はネイチャーリゾートゾーンという位置づけの中で、八幡湿原や臥竜山などの自然と人々が向かい合って暮らしてきた文化を再認識し、それを次代へ伝えていくことを狙いにした「生き活き暮らしの博物館」をテーマとし展開する。

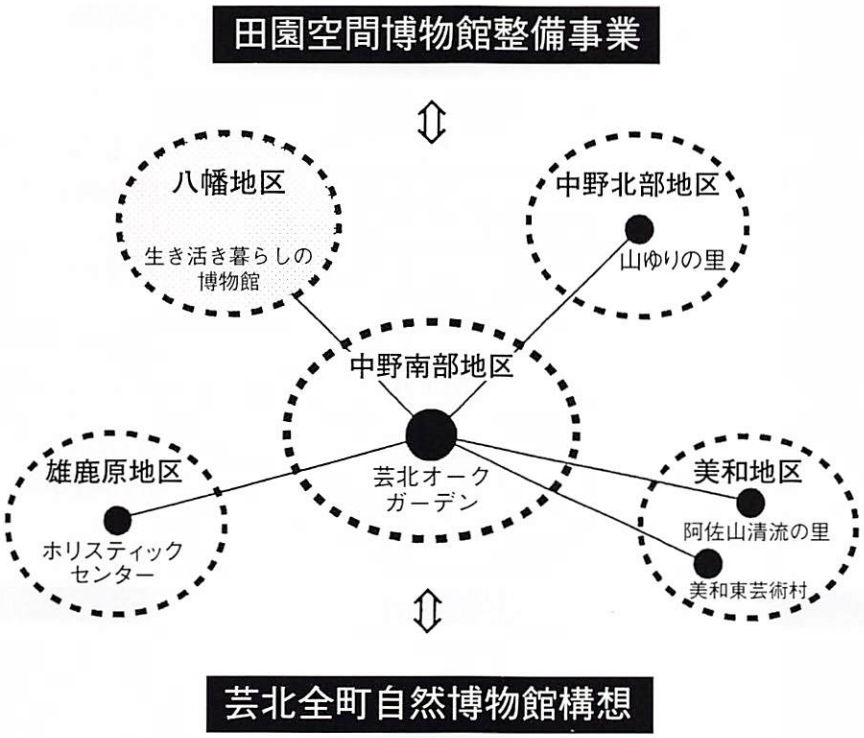


図２　芸北町のまちづくりの方向

●テーマ

生き活き暮らしの博物館

●視点

1）芸北高原の自然とかかわってきた人々のくらしの知恵、技を再評価する場として。

芸北地域、とくに八幡地域の豊かな自然（臥竜山のブナ林、八幡湿原、千町原、聖湖等）とこの地域に息づく伝統文化を再評価し、自然とかかわってきた生活、文化、産業、自然にかかわる資源を保全・復元・活用することにより、美しい田園風景のひろがる地域づくりと地域の活性化を図っていくものである。

2）全町自然博物館構想の拠点施設のひとつとして。

芸北町の最大の宝である自然と人をいかしたまちづくり－全町自然博物館構想を踏まえ、その拠点施設（芸北高原ミュージアム）のひとつの機能と位置づけ、整備や事業のあり方を探っていくものとする。

3）地域の人材の活用や活性化に結びつく場として。

体験できる場や工房、茶屋など、一体的に整備し、地域のお年寄り等がここにかかわり、それが生きがいづくりや経済活動につながるような整備、事業のあり方を考えていく。

図3　事業の方向

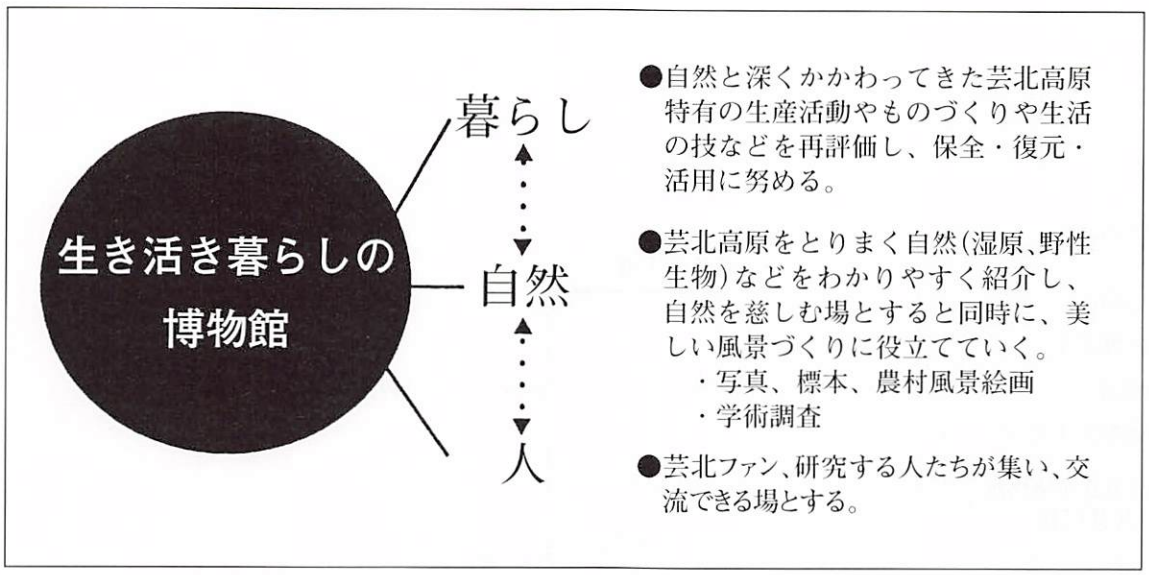


図4　テーマと展開の考え方

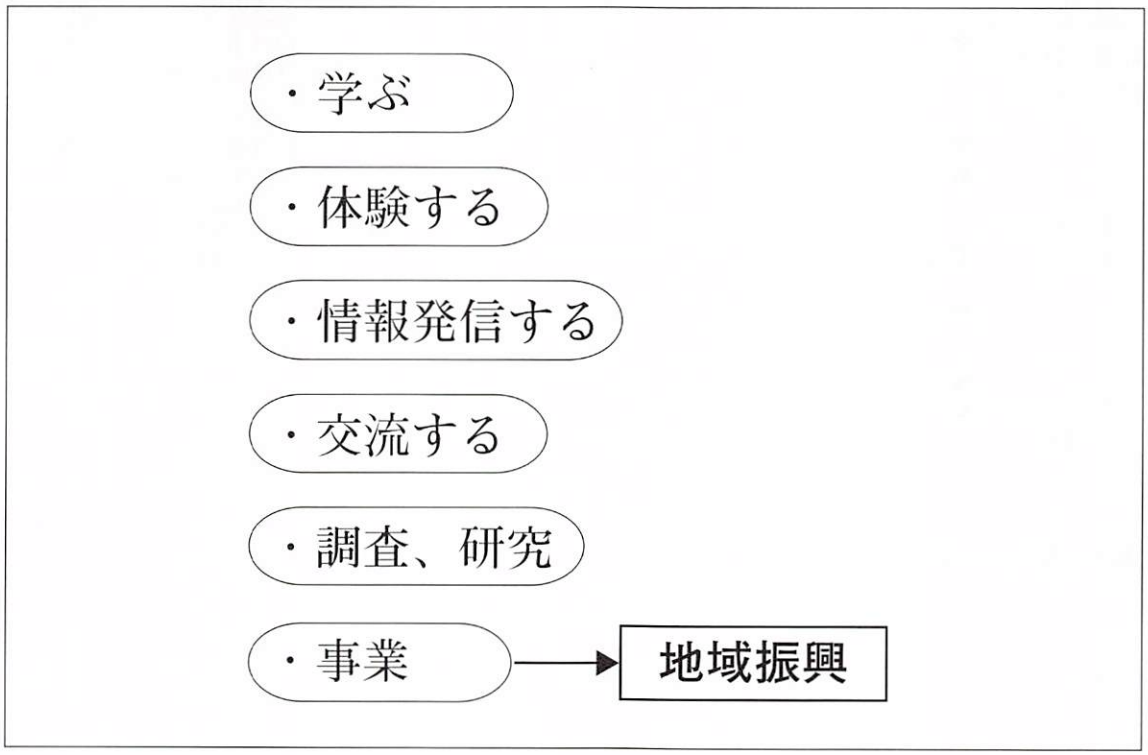
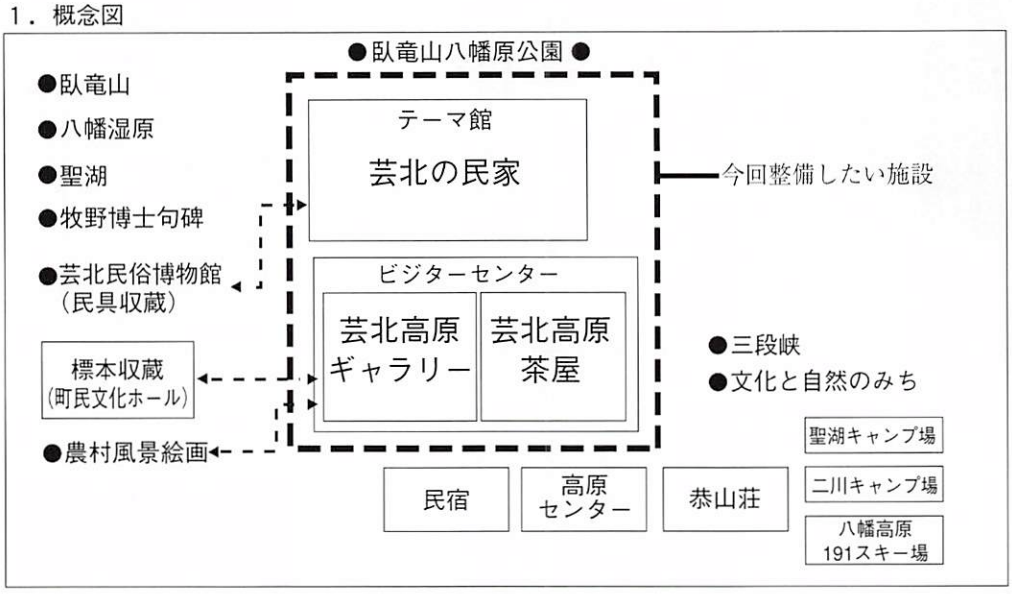


図5　主な機能

1．概念図



2．施設別機能及び概要

名 称		施設イメージ・機能	仕様・面積など	事業主体
1.芸北の民家 （山里のくらし体験館）		●山里くらし体験・展示館として、生産活動や生活に実際に使われている様子を展示、実演し、しかもそれが体験できる、生きた資料館として整備していく。	構造／木造カヤ葺 建築面積／132.66㎡（40.1坪）	芸北町
2.ビジターセンター	①芸北高原ギャラリー	● ビジターセンターの機能をもたらす。 ● 芸北町教委でこれまで収集している、芸北高原の植物や写真、そして蝶や野鳥などの標本類など、テーマを決めて展示していく。 ● また、研究者や愛好家などの研究の成果の発表の場としても積極的に活用を図っていく。 ● 50人程度が入れる自然教室の場としても活用できるよう多目的に活用できる空間ともする。	構造／木造平屋建 建築面積／220.21㎡（66.6坪） ・ギャラリー／116.87㎡ ・茶屋　　／ 78.52㎡ ・共用部分　／ 24.82㎡	芸北町
	②芸北高原茶屋	● 来訪者に対して飲食サービス施設として整備する。 ● 芸北の素材を活用するなど、メニューなども工夫をしていく。		

3．場所　芸北町八幡高原地内

図6　テーマと展開の考え方

1.事業主体、運営主体

●事業主体

芸北町

→

●運営主体

芸北町
(地元活性化委員会)
※施設により異なる

2.事業構造

●土地

県有地を借用

→

●環境、施設整備

■環境整備
広島県等
■施設整備
芸北町等

●入場料収入
●体験学習収入
●飲食、物販手数料収入
●その他

3.運営・管理組織

センター長

施設管理部門
※委託／
地元活性化委員会

体験・展示・ギャラリー運営部門
・企画スタッフ
(芸北町教委)
・体験指導者
(地元の名人等)

飲食・物販部門
※委託／
地元活性化委員会

4.事業展開例

展示・体験学習などの企画・運営

山里のくらし体験館

●四季折々、芸北高原のくらし
・1月～12月
手仕事、生産の道具と技、くらしの道具と技
山里の季節の行事、衣・食など…。

芸北高原ギャラリー

●展示テーマ例
・芸北高原の四季
・八幡湿原
・臥竜山
・芸北高原と植物（春、夏、秋、冬）
・芸北高原と野鳥（春、夏、秋、冬）
・芸北高原と昆虫（春、夏、秋、冬）
・水辺の生きもの　等

自然教室、観察会

●展示及び周辺のフィールドと連動した自然教室や観察会などを行う。

5.その他

・通年営業を行う。
・地元のまちづくりグループ、特にお年寄りたちの活躍の場をつくる。

図7　運営・管理のあり方

以上が，「全町自然博物館構想」の中で，八幡地区をネイチャーゾーンと位置づけて進めようとしている事業計画の素案である．特に，八幡地区は芸北町はもちろん西中国山地の中でも自然資源の豊かな場所であり，町内外のファン，自然愛好家や研究者にとって興味と関心のある場所である．

その上芸北町では，1991（平成３）年度から３年間の「芸北町自然学術調査」にあたり，中越信和教授（広島大学総合科学部）を座長とする調査団を編成し調査を実施したが，調査終了後も調査団の一員としてかかわってくださった多くの方々が，今もなお芸北の自然とかかわり調査・研究そして報告と，貴重な情報を発信してくださっている．この「高原の自然史」の発刊や西中国山地自然史研究会会報「苅尾」の発行などがその代表的なものである．芸北町には豊かな自然があり，多くの協力的な人的資源があり，他に例をみないすばらしい宝がある．

また，こうした中で前述のような具体的事業を進めようとしていた矢先，世界的な植物学者牧野富太郎博士を縁とする越知町との交流，句碑の建立と，自然をベースにした町づくりを進めていく上できわめて都合のいい条件が整ったわけで大きな追い風となった．

今後，西中国山地のまっただ中にある町として，町の個性を大事にしこれを生かして，自然にかかわる資源を保全・復元・活用することによって，美しい田園風景の広がる地域づくりと活性化を図っていく努力をしたい．多くの芸北ファンの協力と支援を心からお願いする．

謝　　辞

本稿を作成するにあたって，横倉山自然の森博物館，および高知県高岡郡越知町の方々には資料の提供などでご支援をいただいた．この場を借りてお礼を申し上げる．

参 考 文 献

芸北町／牧野博士句碑建立実行委員会　1999　「牧野富太郎博士句碑」

国立科学博物館・高知県立牧野植物園・日本大学生物資源科学部資料館（編）1998　企画展「草木の精　牧野富太郎」図録

高知県立牧野植物園（編）　1992　牧野富太郎植物画集

高知県立牧野植物園（編）　1998　牧野文庫資料「牧野博士採集踏査の記録」広島県

高知県立牧野植物園（編）　1933･1937　牧野富太郎日記

牧野富太郎　1943　植物記　314p「染料植物について述べる」

牧野富太郎　1981　植物知識　講談社学術文庫

横倉山自然の森博物館ニュース　1998　「不思議の森から」創刊号

1999年８月31日受付；1999年12月11日受理

図　版　1

A：句　碑　臥竜山麓八幡原公園　1999年６月４日（撮影　佐々木新十）

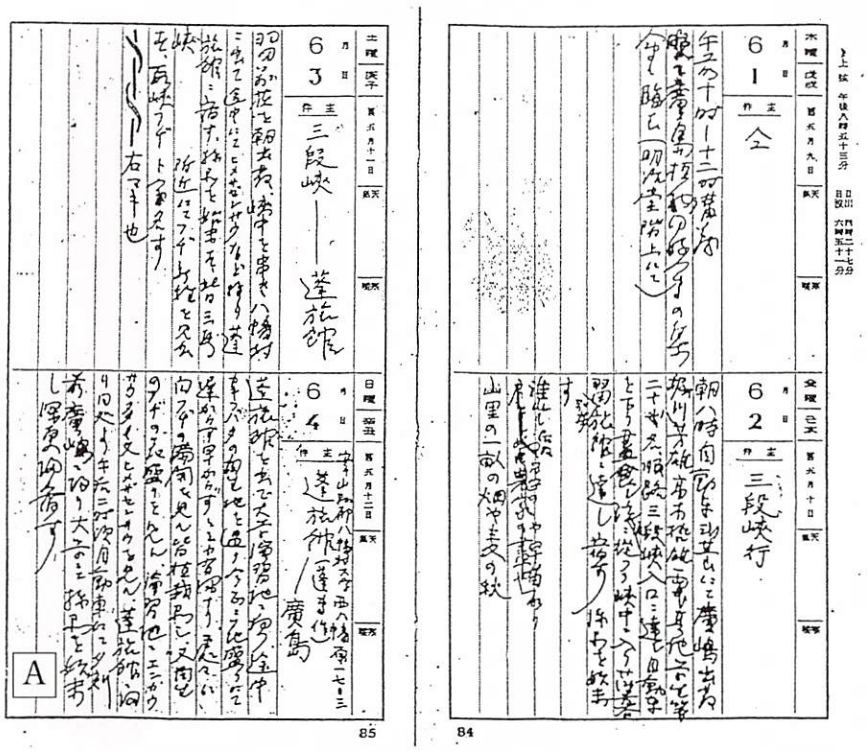
B：除幕式　臥竜山麓八幡原公園　1999年６月４日（撮影　佐々木新十）

図 版 1

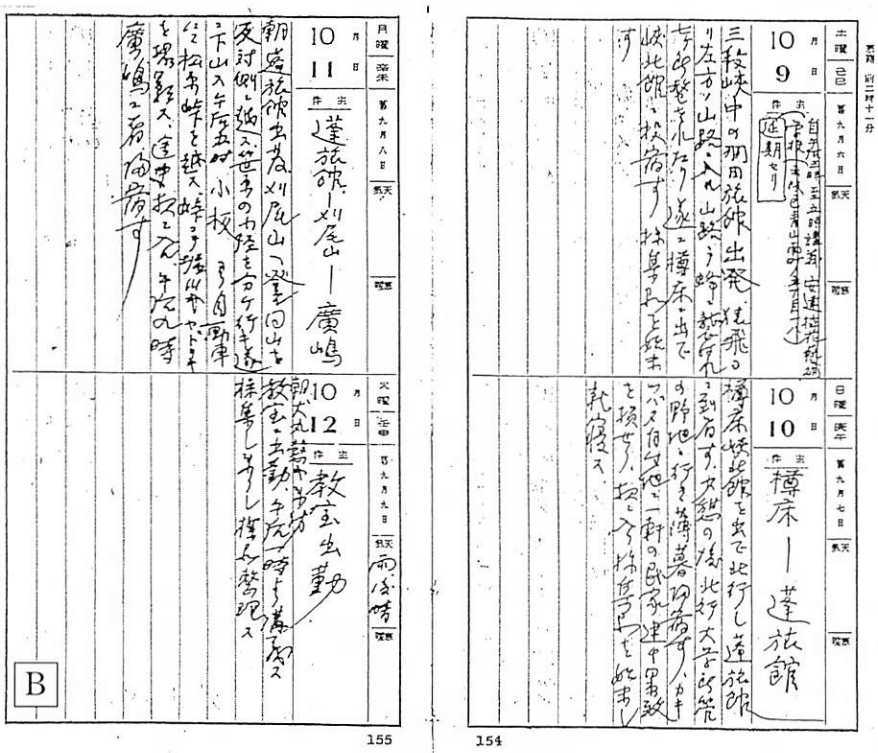
図 版 2

A：牧野博士の1933（昭和８）年の日記
B：牧野博士の1937（昭和12）年の日記
（資料提供：高知県立牧野植物園）

図 版 2



A



B

図 版 3

A：牧野博士一行　臥竜（刈尾）山麓　1937（昭和12）年10月11日（撮影 辰野誠次）

B：牧野博士一行　臥竜（刈尾）山麓　1937（昭和12）年10月11日（撮影 辰野誠次）

後列左から　越智謐武（しすたけ）　升本修三　高木哲雄　児玉　集

前列左から　犬丸　愨（すなお）　牧野富太郎　堀川芳雄　佐藤和韓鵄（わかし）　橋本　忠

図 版 3